

「神」

あ つじ てつ じ
阿辻 哲次 京都大学教授

サル年だから、テレビや年賀状にかわいいサルの絵があふれている。

十二支のサルは「申」と書かれるが、「申」を「さる」と読むのはエトだけで、動物のサルを「申」で表すことはなかった。

「申」はもともと雷鳴とともに空中を走る稲妻をかたどった象形文字である。

「申」をその「稲妻」という意味で使った例は文献には検出できないが、しかし「稲妻」はのちに《申》に《雨》カンムリを加えた「電」で表された。「電」は「稲妻」が本来の意味で、「電力」とか「電線」という意味で「電」を使うのは、近年になってからの用法である。

《申》は「神」のツクリになっているが、「神」もまた「稲妻」を表す「申」から作られた漢字である。

「神」のヘンになっている《示》は、神が招きに応じて地上に降りてきた時に、よりどころとする小さな机をかたどった文字である。神が鎮座します場所だから、それで《示》ヘンの漢字には神に關する意味を表す文字が多いわけだ。

その《示》と《申》を組みあわせた「神」が「カミ」を表すのは、轟音とともに激しい勢いで空から降りてくる閃光を、古代人が神の出現とみなしたからにほかならない。

人間にとって神はずっと、おそろしく、荘嚴な存在であった。レクリエーション気分で初詣に出かけたりすれば、きつとバチがあったことだろう。